
消しゴムをくれた女子を好きになった。【実話】

かまぼこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消しゴムをくれた女子を好きになった。 【実話】

【Nコード】

N4574J

【作者名】

かまぼこ

【あらすじ】

主人公である福田は、

中学の授業で隣の席の女子がシャープ芯のストックが切れ、困っているのを見つける。

福田はその女子にシャープ芯を渡す。

女子はお返しに自分の持っていた消しゴムを真っ二つにし、片方を福田に渡そうとする。

たった一つの消しゴムが生んだ物語。

運命を信じた、とある男女の長い長い物語。

第零部 0、「」（前書き）

この物語はノンフィクション（実話）です。

原作は、巨大掲示板2chの『少し昔話をしたくなった』スレッド。現在、このスレッドへの書き込みはできませんが、過去ログの収納されているため、閲覧は可能となっています。

このスレッドが原作ということもあり、ネタバレが含まれています。初めて読む方は、ご注意ください。

第零部 0、「」

待っていた―

住宅地に囲まれた公園、時刻はおそらく11時過ぎぐらいだろう。この公園は夜になると暗くなってしまう。公園を照らしているのは広場の中央にある白い照明だけ。それ以外は何もない。

俺は彼女を待っている。

待っている時間は長く感じられる。

時間をつぶすという行為が、無意識にタバコを吸う行為を促す。

携帯灰皿がタバコでいっぱいになった頃、彼女が姿を現した。

その瞬間俺は長い長い束縛から解放されたんだ。

束縛、とはいえないかもしれない。

でも、彼女が俺の人生を変え、俺の心の中には常には彼女がいた。だから、俺は束縛されていたのだと思う。

やっと、これで解放される―

俺は、待っていたんだ―

これは、たった一つの消しゴムが生んだ長い長い物語。
この物語は奇跡の物語ではない。運命という名の物語だ。

第一部く中学生編く Q、TIPS

＜登場人物紹介＞

・福田

物語の主人公、普通の男子中学生。
チュートリアルの福田に似ていることから、物語での名前は福田。
中二病で、妄想にふけることもしばしば。

・サトミ

物語のヒロイン。福田と同じクラス。
良くいえば、石原さとみに似ていることから物語上ではサトミ。
天然。

・板倉

福田の親友。
インパルスの板倉に似ていることから、物語上では板倉。
超がつくほどの変態。
女先生（48歳）の靴盗んで匂いをかぐ等、様々な伝説を持っている。

・森

福田の友達。
いつもノートにマンガを描いている。
ちなみに本名。

福田からは君付けで呼ばれる。

第一部く中学生編く 1、未来へ続く道

走っている―

どこまで走るのだろうか―

その先に何があるのだろうか―

今は余計なことは考えたくなかった―

ただ伝えたい。

俺の思いを。

もし、・・・と思うと胸がいたんだ。

そうだとしたら、俺は耐え切れるのか？

いや、今はそんなことは考えるな！

俺には、・・・がついているじゃないか！！

走る。

走る！

走る！！

走る！！！！

朝もやを切り裂く。

朝の冷たい空気が肌に当たる。

今はそんなことも気にならない。

俺にとってのゴールは何だ？

分からない。

でも、一つだけ分かること、俺はあいつのことが――

俺は走った・・・！

第一部く中学生編く 2、シャープ芯と消しゴム

空を見上げる。

別にこれといって意味はないのだが、なんとなく見上げる。

空は青く澄み渡り雲一つない。

どこまでも高く、吸い込まれそう・・・とか詩人みたいなことを思ったりもする。

そもそも吸い込まれるわけがない。大体、何で空が”高い”なんて表現をするのであろうか？

空が高いなんて当たり前だし、雲があったりして空が”低い”場合でも地上から雲底までは、かなりの高さがある。

はぁ・・・、考えても仕方ない・・・。

「・・・であるから、ここの答えは・・・」

中学に入ってはじめての授業で既に俺は憂鬱状態だった。

延々と先生の話が続き、さらに苦手教科ときた。

そんな憂鬱から抜け出そうとして空を見上げていたのだが、逆効果だったようだ。

教室はとても静かで小学校とは偉い違いだが、

よく見ると小学校時代うるさかったやつらは全員爆睡状態だった。

静かなのはそのせいで、中学に入っただけからといって何かが変わったわけではないようだ。

当然、他の学校出身のやつらもこの中学にいるが、そのうちの数人は爆睡状態だ。

俺の予想では、こいつらも小学校時代うるさかったやつら、もしくは授業中に気軽に寝られるやつらであろう。

黒板にカツカツと音を立てチョークが走る。

チョークの走った後が白い軌跡を残して、文字をかたどっていく。

俺の席は窓際、春の太陽の心地よい陽気が眠気を刺激する。
眠い・・・。

寝たらだめなのはわかっているが、眠い・・・。
夢の世界に落ちかけた瞬間のことだ。

「あっー」

隣から小さく声が聞こえた。

俺は隣を見る。

隣の席には女子が座っていて、シャープペンを数回カチカチならし、諦めたかのようにペンを置き、今度は筆箱の中をかき回し始める。
そして、筆箱から手をはなし、再度シャープペンをカチカチし始める。

シャープペンの先っぽからは芯は出ていなかった。

おそらく、シャープペンの芯が切れたのであろう。

俺は、自分の筆箱の中からシャープペンの芯を取り出して彼女の机の上に置く。

彼女は「いいの・・・？」と聞いてくる。

無言でうなづく。

彼女は、小さく「ありがとう。」とつぶやいた。

しかし、彼女は再び

「あ・・・」

と嘆く。

そして、机の周りをキョロキョロ見回す。

芯を落したらしい。そして、泣きそうな顔をする。

俺は笑いそうになりながらも、芯を2本取り出し、再び彼女に渡す。

今度は落ちないように、しっかり手渡しで。

彼女はそれを受け取り、シャープペンの中に投下する。

そして、慌てたように消しゴムを取り出し、いきなり真っ二つ。

片方をメモと一緒に俺に渡してきた。

俺はそれを受け取る。

メモには

「ありがとう。」

こんなものしかないけど・・・。

サトミ」

と書かれていた。

何故か俺は少しだけ萌えた。

俺とサトミは再び授業に戻る。

これが俺達の初めての出会いだった。

そのとき、俺は何の気持ちも持っていなかったし、意識もしていなかった。

それから少し時間が経過し、ちょうど1年後くらい。

学年が2年生に上がり、俺とサトミは同じクラスになった。

第一部く中学生編く 2、シャープ芯と消しゴム（後書き）

くあとがきく

やっつと、本編に入りましたが、

原作どおりではなくいろいろ手を加えさせていただきました。

原作ではサトミは最初に芯をもらった時に

「ありがとう」と書かれたノートの切れ端を手渡すことになっています。

しかし、よく考えると”シャー芯切れてて、文字かけない・・・”
ということに気づき、少し変更させていただきました。

（それ以外にも、かな〜り変更点があります・・・。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574j/>

消しゴムをくれた女子を好きになった。【実話】

2010年10月8日21時46分発行